

## 生み育てる人の心と体に寄り添うための子育て支援者「15のまなび+1」

### 第4回 「視る目を持つ・聴く耳を持つ・伝える口を持つ・ふれ合う手を持つ」

武田 信子 (武蔵大学教授)

最初に、「普段、課題に思っていることを教えてください」という提案に対してでたコメントをまとめました。以下録音原稿をもとに、まとめたものです。

#### 子どもの課題) 発達の異変、ゲーム漬け・スマホ依存・TV依存

子どもの体力の低下、子どもの発達の格差

特別支援が必要な子どもたち

#### 養育者の課題) 養育者の発達の異変、身体ができていない、体験、知識がない

産前からの身体作り

子どもについての知識不足 子どもに出会わないままに親になる

親の語りかけの少なさ、親の対応の格差

親がピンポイントの正解を求めがち、マニュアル育児、大人に合わせて育てる

将来の心配をしている

自分自身の親子関係〈祖父母と親〉の不安定さ

虐待 乳幼児虐待予防としての親支援を考える

極端な場合、思うように育たなければ虐待が起きる

#### 具体的アプローチ 例と解決を教えて欲しい

気になる親子へのアプローチ

自ら気付いてもらえるアプローチ

抱っこされている赤ちゃんの首がガクンとなっている人にどう声を掛けるか

子どもが自分で探索することの大切さを親にどう伝えるのか

#### 何を求めてここに来たか？

一緒に考えていく機会が欲しい、学び合う機会を設けること、仲間との交流

といったことがだされました。

ここで養育者の課題でもある、親がピンポイントで正解を求めがち、マニュアル育児とありますが、子育て支援者もピンポイントの正解を求めがちで、具体的なハウツーが知りたい、そのようなプロフェッショナルになりたい、おんぶ抱っこの方がわかるようになりたいなどと、みなさん思っていないですか？

まずは、赤ちゃんに気を向けることを意識してもらおう。頭で理解するのではなく、体で感じる体験、感じることを、よく見ることの伝え方、この事から、まず私たちが気付く必要があると思います。

ですが、私自身もここへ来る途中、赤ちゃんをすごい状態で抱っこしているお母さんを見かけました。そんなお母さんへどのように声を掛ければ良いのか。

この両方のバランスを自分の中で取っていくことが大切です。ただ、忘れがちなのは、そのときどうすれば良いのか教えられない自分は、もっと何かやらなければと思い講習会に参加したりする、するとみんなが自分よりもっとたくさんのことを知っていて、もっと私も学ばなければと、そっちを頑張ろうとしてしまう。そのようなときに支援者として付ける力や、本当に必要な支援は何なのか？を考えてほしい。私たちは子育てを支えていくという仕事をするプロです。

全員が理学療法士になれば、はいはいのことなどプロフェッショナルなのでそれはそれで良いことですが、子育て支援のプロではないと私は思います。

では、どうすれば良いのか知るため、一緒に学び合う機会がこの場だと思っています。

早期に子育てについて知る機会をどう作るか

養育者が子どもの育ちに大切なことを伝える機会を各地でどう作っているか。

もしこのようなことをしているということがあれば教えて頂きたいし、そうでなければこの2日間からスタートだと思って私たちは始めなければなりません。

今回、助産師さんに参加して頂いているのは、産前からの身体作りや、両親学級では一体何をしているのか、その辺を含めて何かできる事はないだろうかと思いを来て頂いています。

### 支援者の課題)

子どもの発達に対する危機感や異変を感じている支援者が少ない

共通認識の難しさ、スタッフにうまく伝わらない

情報共有の仕方がわからない

年下の支援者から年上の親にどう伝えるか

親同士の繋がりを継続するには？

### 行政との関わりの課題

行政を納得させる方法がわからない

考え方の違いを埋める方法がわからない

現場を見てもらう工夫がわからない

予算をつけてもらう方法がわからない

行政へのアプロートの仕方がわからない

行政の無理解を変える方法がわからない

行政へのやり取りで、ついわからなければ相手のせいにしてしまいますが、赤ちゃんや子どもはどうでしょう。赤ちゃんが泣いているのはちゃんと理由があり、その理由を何とか解消して欲しいと大人に伝えているにもかかわらず、泣いているその子が悪いと思う人はいないと思いますが、それは行政とのやり取りでも同じです。私たちはどのように行政と繋がっていくのか、どのように赤ちゃんに繋がっていくのかを考える必要があるだろうと思います。

そもそも、どうして今日はこのような会をしようと思ったのか、どこまで私たちがやろうとしていることに、みなさんが共感してくれるのか。みなさんの中で計ってもらいながら、うまく仲間関係ができれば良いと思っています。

私も赤ちゃんやお母さんたちと現場で会っているので、今とんでもないことが親子に起きていて感じています。しかも、大人たちがそのことに気が付いていない現状に、どうにかしなければならぬと迫さんと話し合ったりしています。ですが、おんぶや抱っここの話、抱っこ紐が問題だと言っても仕方がないという気持ちはずっと持っていて、3年半前の冬に赤ちゃんのお座りの姿勢がおかしいと指摘が入り、もうここまでできてしまっていると思ったほどです。でも、このような状態に赤ちゃんがなってきたという証拠がない。でも、その間にも赤ちゃんは日々、育っていきます。やはり、そのまま放っておくのは無理だと思い、私は大学の先生という名前があるので、何かあれば私が責任を取るのでやりましょうと始めたのがフェイスブックでの「抱っことおんぶを語る会」というものでした。とにかく、子どもたちの発達が急速に変化してきている、でも、どこがおかしいのかということろまではまだその時点ではわかっていない。最初は海外から入ってきた抱っこひもの問題だと思っていました。ですが、迫さんがいろんな雑誌を調べて、この20年間どのように子育ての抱っこやおんぶが変わってきたのかを、図書館を回って楽しんで研究をされています。

子育て支援をしている人達をターゲットにして何ができないかと、去年からずっと言っていて、東京でやりかけましたが不発に終わったので、今回京都でしっかりやろうと本日の会になりました。もしかすると、みなさんが今日来られた動機は、それぞれ自分たちのところで具体的に何ができるのか、自分ができるようになって帰りたいと思っています。主催した側の気持ちとしては、日本中で起きていることなので、これを一体どうしていけば良いのか。

日本は、モデルとしているところがなく、おんぶ、抱っこに関して世界でこれだけの文化を持っている国はそんなにあるわけではありません。国際的に研究すると言っても、海外の人と体形が違う、その文化を持って来たとしても体形と風

土も違う、東北のおんぶ紐と九州のおんぶ紐でさえ、気候が異なるので違います。現場のみなさんの声を聞きながら、どうしていけば良いのか考えたいと思います。おんぶと抱っこの話だけをしましたが、実はおんぶと抱っこは子育ての中のトピックスの一つにしか過ぎず、今、赤ちゃんに話しかけないお母さんが多く、赤ちゃんの心の声が聞こえてこないお母さんも多くいます。他にも、泣きが聞きわけられない、少し前では、お腹の中の赤ちゃんが重い石のようだ、お腹の中に鳥かごがあるようだ、そのようなことを言う妊婦さんが私たちの世代で既にいました。子育てのセンス、感覚を持たない世代が私たちの世代だとしたら、そこからどうしたら良いのかを、もう考えなければいけない段階にきていると言えます。現場で感じているみなさんや、苦しんでいるお母さんたちの方がその変化をわかっているのではないかと思います。その問題意識を共有し、それぞれが持っている専門性や、お母さんたちと接しているときの感覚、今日ここに来ようと思った熱意やエネルギーを集めてきたとき、これから何ができるのかをみんなで考えていけたらと思っています。

京都は迫さん、東京は世田谷で、抱っこやおんぶに関して色々な動きが出てきています。この二つの場所は、周りからの理解があまりされない中、どのように動きを作ってきたのか。または、困難さ、反応の無さからくる落ち込みに関して、私たちが今日はこれを聞いて帰ることで、現場で理解されなくてもどう対処したら良いのかなどがわかると思います。

また、身体的な発達には、心理的発達と脳の発達〈知的な発達〉が繋がっています。まっ白な天井ばかり見ている子どもと、窓の外の木々から季節の移ろいを見て生活している子どもとでは、脳の発達が違いますし、最初天井ばかり見っていた子どもが急に外を見始めると視界が急に変わり、脳の発達は完全に変化します。こういったことを、フェイスブックの「抱っことおんぶを語る会」にも載せています。他にも、低い位置で抱っこされて、お母さんの胸ばかり見ている子どもと、高い位置で抱っこされてお母さんの肩越しにいろんな風景を見ている子どもとでは賢さも変わってきます。でも、今のお母さんたちは子どもが見ている景色を想像できません。保育士や子育て支援者が、それを見ておかしいと思うことはあっても、赤ちゃんがそれでどう感じているのかを共感したり、赤ちゃんに心地良いきれいな景色を見せてあげようとなぜお母さんは思ったりしないのか。

私は世界各国に行っています。先日もウルグアイに行ってきましたが、いっぱい赤ちゃんを抱っこしている人がいました。それがほぼ男性で、多分まだ首据わりができていない赤ちゃんが多いと感じましたが、そんな赤ちゃんが男性におんぶ

紐も何もなしに、素手で抱っこされていました。スリランカでもそうでした。そして1歳になったら子どもたちは歩き始めるので、ちゃんと発達していることがわかります。日本でもそうだったと思います。

今日は抱っこやおんぶの仕方と、おろし方を話していますが、おろしたあとはどうするのかまで話をしていません。どのような環境の中なのかなどを考えたときに、抱っこやおんぶの仕方だけを教えていても仕方がないということをおみなさんに気が付いてほしい。他でおかしいことは何なのかという問題提起もそれぞれおみなさんあると思います。子育て支援で関わっている人達ももっとそのようなことに気付き、組織的に動く。そして、オリンピックでおんぶする姿を外国の人に見てもらうことも話題にありましたが、一斉行動を一本紐で起こす。そして、そのことを新聞に載せてもらうなど、奇想天外なアイデアをおみなさんに出してもらって何かできないか、楽しく話せたらと思います。

## 京都での活動報告

子育てを楽しむ会で、たまたま手作りで抱っこ紐を教えたことから、抱っこ紐やスリングをするベースはあったように思います。

2010年くらいから、おんぶのことを話したいと思ったとき、抱っこ紐もキーワードに入れていきました。でも道具を調べると、既に素手の抱き方ができていないことがわかり、抱っこの仕方を習って取り入れました。でもそれを取り入れたとき、うちのスタッフと衝突が起こります。ヨガの先生に何万円も払って抱き方を習う必要があるのか？結局、無料でスタッフが教えられるようになり、自己負担はなくみんな覚えてくれました。実際、教え始めるとお母さんたちの食いつきが違いました。でも、それだけ教えていても赤ちゃんとの会話ができていないように、それだけではいろいろなことは解決していかないことがわかり、ベビーマッサージを取り入れました。抱っこ紐を習いに来たお母さんの赤ちゃんがそっくり返って抱きついてくれない、抱っこ紐のことを教えても赤ちゃんの体が硬くマッサージをしなくてはいけないと、いろんなことがグルグル回るだけで、一体何が問題なのか。突き詰めていくと親子のコミュニケーションが取れてないことがわかりました。もう一つ勉強したのは安心感ということで、サークルオブセキュリティプログラムという、安心感の輪について4日間の研修があり、赤ちゃんが親から離れ、戻ってくるとき何が起きているのかを徹底的に学びました。コミュニケーションと安心感の輪、この二つのベースがなければ、お母さんたちには無理だと思いました。

子育てを楽しむ会では、各ひろばの講座の中で、抱っこの講座とベビーマッサージは残しつつ、できれば、わらべうたや安心感の輪のこと、日常の遊びのことな

どをセットにして、ねんねちゃんコース、よちよちちゃんコースなど、3回ずつのコースを作り、そして参加者同士、育児不安やいろんなことをコミュニケーションする新しいコースを今年やってきたところです。やはり、ここまですると、少し成果が出てきたと感じていますが、単発でプログラムを入れても、子育て支援の現場ではあわないかもしれない。というのも、お金を払ってプログラムに行っているからこそで全部が無料になってしまうと、今度は有料でなければ来られないお母さんたちも現実にはいます。抱っこ紐の販売もしていますが、買いに来たから講座に来られる人もいて、できれば支援の場で販売というのは利益が出る部分ではないので無くす方が有り難い。ですが、参加費を払うプログラムなど、買いに来たから来られる人、無料だから来られる人など、いろんな人がいるのでいろんな入り口を持ちながらやっています。私は新しいプログラムを取ってくるたび、スタッフとハレーションを起こしていますが、実際やり始めなければと常に思っていて、お母さんたちの反応があって初めて納得していける、この積み重ねだと思っています。

Q：何か持ちこもうとしたときスタッフが反対する、でも持ち込まなければ始まらないとありますが、それでは相談を持ち込めないと思うのですが、なぜ持ち込むチャンスがあるのか。

A：自分で助成金を取ってきてやっています。申請書にもう書いてしまったのでやらなければならない状況を作っています。

Q：辛いときもあると思いますが？

A：スタッフがいる前では言いにくいですが、やはり代表は経営者です。現場がうまく回っている状態で安泰してしまったら衰退していってしまう。やはり世の中に起こっている問題を先取りして、私はいつも一つの問題を聞いたとき、本当は一つではなくいくつもあるだろう、そして次に起こらないためには予防が必要だと思う。でもそれをするとなをしているのかわからない人になってしまったり。最初はスタッフとのハレーションが怖かった。でも私はそういう役割だと割り切って、そういうのをわかってもらうためのチームは、子育てを楽しむ会には申し訳ないですが、子育ての文化研究所であり、今回のみんなの集まりだったように思います。

私はこのようなときゴキブリの話をします。ゴキブリが1匹いるということは、30匹見えている人と、この1匹だけ取り除けば良いと思っている人との差があり、

30匹見えている人にとっては相当おぞましい世界ですが、それが見えない人に見

えるように説明しなければならないし、予防もしなければならない。今日、ここ

に集まっている人達はもうゴキブリが見えている人達だと思っています。

### 東京の世田谷からの活動報告

世田谷子育てネットという団体に中間支援を目指していて、もともとアミーゴという産前産後の活動をしていました。産後の家にご飯を作りに行くのと、助産師さんと組んで体のこともやっていました。

当時16年前に、三重から戻って東京で始めたときに、防災を考えるサロンをしていました。以前、私は名古屋の東海豪雨で水没した経験があり、防災を考えるサロンで、いざという時はこれで逃げるという意味で、サラシでおんぶすることを教えていました。その後スリングが流行し始め体験もしました。そういうところから始まっています。

私は東京都世田谷区で、どこまでも自転車で行くエリアで、車で行くところとまた問題意識が違ふと思います。近年で言えば、ずるずるしたスリングで自転車に乗っているお母さんが増えてきたこと、それが見ていてとても気持ちが悪かったので、小児科の先生にこれは良くないと言いつけたら、それで死亡事例はあるかと聞かれました。死亡事例がなければ小児科は動いてくれない、その経験が、私たちがよくないと思った時点は早過ぎて誰も理解してくれないとすごくわかったことと、迫さんと以前、体のことをしたときにも色々ありましたが、広場がそれをするのは良いのか、親に指導的になるのではないかという難しさがとてもあり、すごくモヤモヤしたことがありました。

私たちがしなくてはだめだろうと当時から言っていて、やりたい、聞きたいという人もいっぱいいてくれましたが、道具になるとこれはどこで買えるのかという話になったり、あとは先生と言われるのが私にはピンとこなくて、やはりおんぶと抱っこはオープンソースですべきだと私は思っています。

ただ、プログラムの方が入れやすかったので、私が遠野のわらべうたの木津さんや、理学療法士の中原さんに来て頂いたりしているのは、武蔵大学で集まったことがきっかけです。あそこで私は入り口が見えたような気がして、無理して来てもらい、その代わり支援者の人たちには誰でもどうぞという場にしました。そのとき結局、私はその場で喋ったり、聞いたりしながら一人で盛り上がりますが、地元の私たちの仲間には全然伝わっておらず、特に自分のところの広場ではまたプログラムを増やすのかと言われたりしました。一人、必ずその担当になってくれる人を〈特に保育士さんの反応が良いですが〉頼み、木津さんの係り、中原さんの係りとして付けて、講座をするときにはそこにずっとフォロワーでいて貰ったりしています。

ここだけの話ですが、語りかけ、あやし方講座というと、自然と上手な人は来ず、

ぎこちない人ばかりの場になったり、わらべうた講座という、手遊びはしないのかと言ってくるお母さんがいたりして、そうでないということを伝えたくてタイトルを変えたりした話もありましたが、その人たちを日常の中に戻す役割がなければ、一つのイベントで終わってしまう。おんぶと抱っこでも先ほど言っていたように、うまいと言って褒める人だけがいても、明日からやってみるとうまくいかないとなったとき、広場で練習し合えるようにしなければ、ずっと「次の会はいつですか」「どこに行けばそれを習えますか」になってしまう。

まず、そのような環境を作りたいのが一つと、あともう一つの問題としてお母さんたちが声を出せないということです。最初、体オーケストラをやっている人に来てもらって声を出すことをやってもらいました。あとはゴスペルのチームを作って声を出すこともしてみました。多摩川という川沿いで船を漕ぐときの民謡が残っていて、それをずっと歌い継いでいるおじさんたちがいます。その民謡を耳で習いながら声を出す、今は一人カラオケなど行っているはずですが声を出せないお母さんが多い。喉が絞られる気がしたり、ある人が言ってこられたのは、「私はいじめられるのが怖かったので教室でもずっと黙っていた」などのことを聞きました。こういったことから始めなくてはならない。私は私の地域で、ここが気になると思った所を糸口にしています。

もう一つは法的なところで、どう取り組むのか考えていて、みんなすぐに「母親学級でやれば良いのに、健診のときにやれば良いのに」と言いますが、そこに入る難しさを私たちは嫌というほど知っています。母子保健の領域はとても怖いところで、怒られる、阻まれるという記憶があります。私たちは産前産後のスルーケアという講座をしていますが、それも最初、産前は無理だと言われ、3ヶ月までにしたかったのですが、母子保健の領域すぎるので6ヶ月までに伸ばせと言われて、ケンカをしながら4ヶ月までにした経緯があります。それでも「4ヶ月と言ってしまうと手前過ぎるので5ヶ月未満として欲しい」など、行政はなるべく幅広い感じの対象にさせたい、母子保健領域に触れたくないなどの、その辺の空気を読まなければなりません。

最初は年10回でしたが、やっと今年から年50回になりました。そのうち25回は世田谷では児童館直営であり、その場所を借りるというやり方で、25回を2回、プログラムを実施しています。体のことなので、赤ちゃんのことではなく、自分のセルフケアだから来られるという人もいて、また少し違う普段広場で会っている人と違う人になれる。こういった入り口がみなさんの自治会のプログラムにもきっといっぱいあると思います。うちは児童館に着目して、児童館では学童保育がなくなって乳幼児をするように言われましたが、何をすれば良いのかわからない。そんなとき「それを入れると、乳幼児がそのプログラムに来てくれる、そのあと児童館とはこういう場所だと知るのに良い」と言いながら入れてもらっ



たり、そのあとは妊婦さんにも来てもらったりし、「妊婦さんの隣に赤ちゃんがいる状態ですと、赤ちゃんはこんなに大きな声で泣くなどを知ってもらえる」、このような少し売り出しの言葉をみんな考えて行政の人に意味があるように伝えていきます。

もう一つの軸は小学校から大学まで、どの場面でも良いので赤ちゃんを若いうちから抱っこする経験をもつこと。明日、中3の家庭科でしますが、でもそれもまだ仕組みになっておらず、来て下さいと言ってきているところにだけ今は行っています。あとは防災関連で、地域の人なぜこんなことを防災訓練をするの？とビックリするくらい、そこだけサラシでおんぶをすることが若い人の間で人気になっています。町会長さんたちは、若者が防災訓練に来ないと怒っていたので、「まずは防災訓練に来てもらうツールとしておんぶをしませんか」というようにしました。このように、サラシというコンテンツを入れて、防災訓練の一角でおんぶのことをしていると、「懐かしい、私は妹をおんぶしていた」と言う人たちが遠巻きに見て興味を持ってくれる。

あとは、伝え方として、お母さんたちに「おんぶをすると、なぜか地域の人たちに褒められる」という言い方をしていて、なぜかわからないけど「あなた偉いわね」と絶対言ってくれる、そしてそのとき、すかさず自己紹介をして自分の子どもの名前を覚えてもらう、すると、いざとなったらあそこに赤ちゃんがいるからと助けてもらうことができるという言い方をしています。

あと実際、防災訓練のおじさんに言われたのは、「今のお母さんはみんな前に赤ちゃんを抱っこしているので声をかけにくい」ということ。お母さんの胸元を見るのが悪いと思うらしく、おんぶしているとあやしやすいとおじさんは言います。そのような話をお母さんたちに伝え、地域に愛されるためにという言い方をしたりして、ヒットする言葉をいざというとき使うようにしています。

それから、割とナンパ術が流行っていて、広場で信頼関係がない人にすると失敗して二度と来てくれなくなるので、むしろ行きずりの関係の方がやりやすく、断られたら謝って去れば良いので、そのような人に果敢に攻め込みます。

伝え方として、「間違っていますよ、赤ちゃんがひっくり返っていますよ」「赤ちゃんが苦しそうですよ、大丈夫ですか」と言ってしまうと、自分もスリングを使っていたとき、周りからそのようにすごく言われて嫌だったので、「大きくなってくると大変ですね」と体のことから入るようにしたりします。「腰痛めますよね」「重いですよね」などの話から入ると、お母さんも「そうなんです」と話してくれる。そうしてから「もう少し赤ちゃんを高い位置にした方が楽かも」と直してあげたり、手を出すようにします。

このように、その人の困りごとを見ながら入り口を作るようにしています。

## 母子保健の方からの報告

Q：母子保健の立場にいる方に少しここで話を聞いてみたいと思います。

このように育った子たちが一体どうなっているのかということも聞いてみたいと思います。保健士さんに、例えば、妊婦の体の作りについて、今のうちからこういう風に言っておけば新生児のとき困らないのにと子育て支援をしているとありますが、それを伝える側〈助産師さん〉はどう思っていますか？

A：

1：私は明石市の行政の方に委託で入っている、助産師保健師なので助産師の立場でも入れるのでやりやすい立場でもありますが、うちの市の場合、私がそこで十数年いることもあり、保健師は赤ちゃんの抱っこの仕方や腹這いの仕方などの重要さはよく判っていて、今は抱っこの仕方でも健診で伝えたりしています。

そんな関係があるので、母親学級のような、市でやる教室の中で抱っこの実習を試してみたりと展開はできています。ただ軽微な状況で、私がいるからそのような方向に進んだという部分があるので、逆に言えば、そういう人間が保健師なり、助産師なりにいけば入っていける話だとは思っています。

例えば、抱っこの仕方を保健師からこのように教わったと話がでたとき、それをどう処理するかですが、自治体側というのは市民からのクレームが一番怖い話なのでクレームが出ないように動いていく特質があります。逆に言えば、市民から声があがらなかつたり、自治体からこうやりませんかと言う声はあげにくいのが立場上あります。例えば保健師がこのような抱っこをしていたと気になったとしたら、もし名前がわかれば名前でも構いませんが、少なくとも管轄の保健センターなどの母子関係の方に、「こんな風な話を聞いたが、ここはどのような説明をされているのか教えて下さい」と、電話なりでコンタクトを取って教えてもらうことをすると、オフレコですが、こんな話が出てきたと大騒ぎになりどうするのか会議が開かれ、ではみなさんに伝えるときはこうしようと話は進みます。

みなさんのマンパワーで、個人的に、電話なり何なりで積極的に保健師を引っ張ってこることができれば現場としては助かると思っています。

2：私は助産師ですが、お産の現場から離れている助産師なので助産師と一括りに言っても、分娩施設にいる助産師が持っている問題意識と、地域で活動している助産師の持っている問題意識は違うのと、助産師会にみな属していますが、なかなか同じ助産師の中でも共通の認識が持っていないのが事実です。

授乳の話も、聞く人によって言うことが全然違うという混乱を医療従事者がもたらしっていると感じ、反省点だと思います。同じ職種の人たちの中で勉強会を持って、なかなかみな忙しく、問題意識を持っていなければ聞きに来ないので引っ張り難い。逆に言えば、みなさんのように、地域で活動している人の中から聞いて

てくれそうな専門職の人をどんどん巻き込んで、みんなで一緒に地域で勉強できる場をもっていかなければ、お母さんたちにかえって混乱をもたらしてしまいます。地域から作っていくのが今はベストだと考えています。

Q：みなさんが自治会長さんと顔見知り、声をかけられる人が結構いることはわかりましたが、では、防災関連の話はどうでしょう？

A：広島は安佐南区で土砂災害があったので、安佐南区が呼んでくれて防災講座と銘打ち、でも呼ぶときのタイトルは「楽になるおんぶ、抱っこ」として、防災と知らずに来た参加者もいました。そこで抱っことおんぶの話をする機会がありました。

Q：予算といえば、どのように動いているのか教えてください。

A：これは必要だと思うことをコンパクトにまとめて、いろんなところに発信しておく。行政の方との関係が長くなると、最初は決定権のなかった人たちが決定権のある立場になったりするので、行政は縦割りだといろんなところで言われますが、専門性を深めることを考えると、縦に振って頂くという人たちも必要です。相手の職種の特性、立場、相手がやらなければいけないことを私たちが理解し、私たちの方で横系を通してあげるといふ風にいつも私は思っています。

どこにハマるのかわからないような事業でも、少し自分のところに引っかかるように言っていると、予算が余ったり、あるいは国からそのような予算が出てきて手を挙げ一応通ってもノープランなところもあります。そういったとき企画持ち込みで可能になったりもするので、日々こういうことが大事だと伝えておくことだと思います。

## 体育教室から

Q：では他に、今、子どもたちの体の面、心の面もそうかもしれませんが、体育教室で起こっている実例を話して下さい。

A：幼稚園の子どもと小、中学生、あとはうちの教室を卒業した大学生も来ている体育教室をしています。

実例を挙げていくと、幼稚園の年長さんや小学一年生の顔がとても気になります。やる気のある顔ではない。私は特にバギーに乗っている子どもの顔をよく見っていますが、もう歩いたら良いのにという子どもでもバギーに乗っている。そんな子どもたちの顔を見ると、ボーッとしていてボーッとものを見て、バギーの中になにか食べていたりします。その状況を見ているととても不安になります。

そして、そんな子どもたちが幼稚園に入ると、先ほど言ったようにやる気がない。一方、やる気のある活発な子どももいますが、10年くらい前から、このやる気のない子どもたちが目に付くようになりました。何も興味がない子どもたち。

やはり、そのような子どもたちは周りから少し小声で変わっていると言われたりする子どもたちです。

小学2年生の男の子を連れて海に行ったときの話を、水着が濡れたので脱ぎビニール袋に入れるように伝えると、まずビニール袋がリュックから見付からない、次に、気付けばビニール袋が開けられず泣いていました。その子はやはり、やる気のない顔立ちの男の子で、どうして開けたら良いのかわからないと言います。一体、お母さんは何をしているのか。その子は「先生、お弁当どこにある？」など、どこに何があるのか全部聞いてくるような子どもだったので、家では全てお母さんがしているのだろうと感じました。

それから先月も、スキップが最近できない子どもが多いので、ケンケンをして一周する遊びをしました。「次にマット運動をしましょう」と言うと、小学5年生の女の子が静かに座ってこちらを見ている。「なに？」と言うと「ううん」と言う。でもマット運動をみんながやり始めると、また目で何かを訴えてくるので、「何かあるなら言って」と言いましたが、その女の子はコミュニケーションが取れない子で、何度も訴えかけてくるのですが口から言葉を発しようとはしない。小学5年生でそのような状態です。最終的に足が痛いことがわかり見てみると折れているようだったので、お母さんと連れだって病院へ行き、病院で骨折しているとわかりました。まず驚くのは、今はケンケンで骨折をする時代で、骨折は痛いのにそれが言えないということ、コミュニケーションが取れない子どもがいるのが不思議だと思いました。

それから、今、大学生の子どもが、うちの体操教室を卒業して手伝いに来てくれますが、その子が非常に攻撃的なことです。大学生なので虚勢を張って小学生たちの前で偉そうにしているだけなのかと思っていたのですが、教室でも怒鳴ったり怒ったりしていて、それを注意すると反発してくる。その大学生が小学生だった頃を考えると、背が小さく運動も普通、中学でバスケット部へ入りましたが背が小さかったので不遇な状況、それでも高校へ行き再度チャレンジしますがだめだった、そのような背景も攻撃的になる要因にあるのかと思ったりします。

このようなことから、私が赤ちゃんのことを知りたい理由は、幼稚園の年長さんや小学生の子どもたちはその頃どうしていたのかを知りたい。プロの指導者として保護者に伝えるとき、しっかりその辺を保護者から聞いてアドバイスするようにしています。

そしてもう一つ、今、目と脳というところでビジョントレーニングを勉強しています。これも10年くらい前、跳び箱を練習していて、走って手を前につかないと飛べない、もっと遠くに手をつかないと飛べないと、何度教えても手が遠くにつけず飛べない子どもがいました。この位置に手をつくよう跳び箱にテープを貼

り、手の位置を記してもだめだったとき、この子は見えているのか不安に思いました。距離感が見えていないのではないか。

それで調べていてビジョントレーニングに出会いました。焦点が合わない子ども、板書ができない、学校の黒板が見えない、罫線がグラグラになっている、焦点が合わないのもまた黒板を見る、でもまだ合わない、そのやり取りをしながら焦点がやっと合ったと思ったら、遅くて先生に怒られる。その子は一生懸命やっているのに、怒られ暴れたりする事が起こったりしています。そのできなかった子どもに、しっかり焦点を合わせるような訓練や遊びなどのビジョントレーニングをすると、すぐ跳び箱が跳べるようになりました。赤ちゃんの追視もよく育ちの中で言われますが、とても重要なことだと思いました。

### 発達障害の増加の背景にある現代の社会の在り方

発達の話で今、発達障害の人たちがとても増えていることに関して、私はこう思っているという話をします。私が臨床心理士で精神分析を少しかじっているので、そこからの話をさせてもらいます。多分、今も昔も脳に傷を持っているというか、弱さ、脆弱性というか、それを持って私たちは生まれてきていると思います。たとえ弱さを持って生まれてきても、自然の中でいろんな刺激を受けながら生きていけば、それがあある意味、矯正されていくというか、目立たなくなっていく、バランスが取れていく、そのようなことが自然に行われていた時代がずっとありました。例えば、デコボコ道を歩いているとバランスを取らざるを得ない、それから、暑かったり寒かったりすると体温調節機能を働かせていかなければならない。それが、平坦な道をずっと歩き続けていたらバランス感覚が調整される機会がなくなってしまう。気温もずっと快適な中にいると汗腺もうまく機能しなくなります。

赤ちゃんは 290 日お腹の中にいて、その間、いろんな調整を受けますが、それでも弱く、生まれてからもその調整がずっと続くという風になっていたのが、調整そのものが働かなくなってきたのが今の社会ではないかと思えます。

すると、その四角い箱の中で育てられ、例えば会話をするのが自分の親とテレビだけ。そのような状況で、例えば親に触られるという感覚刺激がありますが、その触られることももう無くなり、親は両手を離して抱っこしている中で、赤ちゃんはしがみついたときの感覚、その感覚を身に付けないまま育っていくと、その先どうなるのか。考えると、やはり発達障害が普通ではない子どもたちが多数見られるようになってきました。

その弱さもいろんなレベルの弱さがあり、ある意味、脳が普通の人と違う形で生まれてきて、少くくれば、もしかすると生きていながら修正されていたかもしれない。でも、その少くくればの人たちが、膨大に発達障害だと診断され

る。私は東北などでも話をしますが、雪の中にハマったり、落ち葉の中に埋もれたり、そういう体験をしている中で感覚は養われていきますが、その感覚を養われる場がない子たちがどうしているのかというと、プラスチックのボールプールに入り 1 週間に 1 時間、しかも 1 回何千円というお金を払って大人が見ているところでトレーニングを受けている。雪を触って、雪の中に入ったりした子ども、それを遊びの中でたくさんやってきた子どもと、そうではなく週に 1 度だけボールプールなどに連れて行かれる子どもとでは、やはり発達に差がでてきます。でも、発達障害だと診断を受けると、そこに通わなければいけなくなっているという現実があります。

身体障害は色々ですが、身体障害でも私が知っている症例では脳性麻痺の子どもが、自然の中で走り回っていると、ほとんど普通の子どもと変わらなくなったりする。重複障害で 18 歳まで喋れなかった子どもが、保育園の自然の山の中で走り回っていると 20 歳で言葉を発することができました。18 歳から 20 歳まで 2 年間、保育園児たちと一緒に走り回っていると言葉を発することができた。でも、もしそれをもっと早い段階、2、3 歳で始めていたら、重複障害の素質を生まれ持っていたとしても、もっと早く喋れるようになったのではないかと思います。

ただ、これを言うとき、障害児が普通児に近づくことが幸せなのか、社会を構成する人たちの間の中で平均に近づくことが良いと言いたいわけではありません。

でも今、いろんな人たちが障害だと言われています。去年カナダにいましたが、例えば大学になると合理的配慮と言われ、高校の先生たちがとても困っている現状がありました。発達障害だと診断を受けた子どもたちが、試験の時間を 1.5 倍にして欲しいと言ってくる、それで 1.5 倍にして特別な配慮をして大学に入ります。すると、その中には本人は比較的大丈夫なのに、親が大学受験に有利だからと、その診断書をもらってきて、より良い大学に入れようとする動きがあると言います。本人と話をすると大丈夫だと言っているのに親はそうは思わない。しかも、そこを説得しようとする人権委員会に訴えられ配慮をするよう結論をだされた、しかもそれが 1 件だけではなくたくさんあると言います。誰のために、何のために、合理的配慮をするのだろう。そもそも大学に入ると、次は就職してそのような配慮をしてもらえない中に入っていく。それはどういうことなのか、いろんなことが少しずつ少しずつズレてきていると感じます。

例えば、遅刻しがちなのは問題なのかどうか。

時間ピッタリにこれだけの成果をあげなければいけない、それはロボットのような世界ですが、そのような中で生きていくと、それができない人は障害という風

になってしまう。私がとても衝撃的だったことは、20代 のとき世界各国からきた若者のキャンプで「ちょっと散歩に行ってくる」と出かけたアラブ諸国の方が、なんと帰ってきたのが5時間後だったことです。この時間感覚のズレを考えたとき、日本人で5時間散歩に行くと問題児になりますが、向こうの人にとってはそうではない。他にも、落とした物を拾ってしまうと「盗んだ」と言われ、犯罪になってしまうこともあります。国によっては、物が落ちていると、神様からの贈り物だと思っている国もあり、所有という概念がない国もあります。国によっては誰が障害と言われる対象なのかかわからない中で、先進国は、時間内に〇〇ができなければならないというプレッシャーの中で、どこか弱さを持った人たちが、それが矯正されることもなく育っていき困った状態になってしまっている。もちろん、それが生まれつきでそれが矯正されにくい状態の人たちがいることも私は全く否定しません。ですが、こんなに数が増えてくるというのは、その人よりも、むしろ周りの社会の在り方なのだろうなと思ったりしています。

### 自分の体験から自分なりの正解の幅をとって物事を考える思考の必要性

そんな中で赤ちゃんが生まれ、どのように育つのかを、例えば、数十年前と今と比べて考えてみたとき0歳~1歳までの間に、どのように五感を育ててきたのかということ。今いる部屋の窓にもガラス越しに風景が見えます。でももっと昔であればガラスがない状態で風景が見えていた。マンションに住んでいて窓がない部屋もあると思います。五感そのものが育つ、その刺激がない場所で育っていたらそれは発達しません。そのようなことが身近にあるのではないかと思います。何十年前と比べて、0歳から1歳の赤ちゃんの身体的発達と心理的発達、そして脳がどのように刺激されていたのか少し話し合っただけで欲しいと思います。

いろんな教科書に発達のことは書いてあります。その発達の本に書いてあることを学ぶのも良いですが、それ以前にまず自分たちが0歳から1歳のとき、身体的な変化はどうなっているのか、例えば、畳の上をはいはいするのと、すべすべのフローリングの上をはいはいするのと、土の上をはいはいするのとでは身体的にどう変わっていくのかなど一つ一つ丁寧に考えていく。

例えば、産婆さんに自宅で取り上げられるのと、病院の清潔なところで取り上げられるのと、帝王切開で生まれるのとでは、生まれてきた子どもの見る世界がどう違って、親の心理はどう違うのかなどみなさんの体験をもとに、身体的、心理的、知的にどう違うのか考えて欲しいと思います。いつも下の位置で抱っこされていると身体はどうだろう、心はどうだろう、脳はどうだろうと、丁寧に考えていけば、心理学の教科書を読まなくてもある程度答えを出していけると思います。そして、それをみなさんだけがするのはではなく、来ている両親にも、自分が子どもの頃と今の子育てはどう違うだろうと話す機会を作りたいと思います。

この子どもは家の中でどんな風に暮らしているのか聞く、すると身体的発達にどのように制限が加わってくるのか考えていくことができる、このような思考をみなさんが持っていることが大切です。

3歳までに脳のほとんどが発達すると言われ、この時期小学校教育のことを親は色々考えます。しかもこれから家庭教育コーディネーターという職種が国で認められるようになるとこの年齢までに教育が入ります。保健体育や家庭科の授業で子どもの発達は絶対やっていたはずですが、覚えていますか？3、4歳までの間に、自分たちのいろんな体験があり、その体験に基づいた言葉が自分の頭の中にあります。自分の両親が喋っていたり、自分の兄弟が喋っていた言語がみなさんの脳の中に入っています。みなさんの両親は論理的な人なのか、非論理的な人なのかどちらでしょう、どんなタイプの喋り方をする人なのか。べらんめい調な言葉しか聞いたことがない子どもは、物事を考えるときべらんめい調な考え方をします。

同じ日本語でもいろんな日本語で思考しています。すごく論理的な両親の会話を聞いている子どもは、普段から論理的に思考するようになれるというように、言語環境が脳を作っています。

それから、みなさんは食べ物で脳を作っていると考えたことはありますか？

脳も食べたもので作られている、その食べているものは30年前と今とではどう違うのか、そしてそれは脳にどう影響しているのか、そしてこれから50年後はどうなっているのかなど、そういう風に考えていき発達を捉えていく。その力がなければ、人から常に教えてもらっていたら、教えてもらった範囲しかわかりません。マニュアルや正解を教えて欲しいと言いますが、人間ほど正解がないものはないと思います。私が母に言われて一つだけ覚えていることがあります。

自分のお腹に赤ちゃんがいたとき大変だと話すと、「そりゃ大変だ、ロボットを作るより人間を作る方が大変だ」と言われたことです。

そうやって大変な形で生まれてきたものに対して、正解はないということをどう自分たちが思っているのか、そして自分の体験から自分なりの正解の幅をとって物事を考える思考を私たちがどれくらい持っているのかが、多分喋っている普段の支援者の言葉の中に現れてくると思います。

学生の中で私が気になるのは「〇〇してあげる、〇〇させる」という言葉をしょっちゅう使う学生がいること。ものすごく上から目線で、私は一つ一つ耳に触ります。その言葉遣いをレポートに書いてくるとチェックして書き直させます。

あとは、〇〇べきという言葉遣いをする人も、私はcan、willのように〇〇したいに変えるくらい。その思考そのものが、普段から子育て支援者がどう思ってい



るのが、お母さんたちにも伝わっているだろうと思っています。

地域で物事を動かしていこうと思うと、子どもと親をずっと見ていくことになりませんが、それで自分たちにすごくいろんなものが見えてきたとき、どうしてあなたには見えないのという気持ちになってイライラしたり、私たちこんな良い事をしているのに、とってしまったとき、少し思考を変えて、向こうの立場になり、向こうの声を聞いたらどうだろうという風にしてもらえたらと思います。

子育て支援者と言ったとき、直接支援で、例えばおんぶを覚えたので自分が教えたくることがあると思いますが、自分が教えなくても自分のスタッフに教えて、そのスタッフが、あるいはお母さんに教えて、そのお母さんが教えてくれるなど、そうした方が多分動きが良くなるだろうと思います。

その一つ一つの動き方をいろんな人から聞き、今日に繋がった方たちとこれからも連絡を取り合ってもらえたらと思います。

#### 感想

具体的な取り組みの事例などのお話しが聞けたことと、武田先生からの子育て支援者にとって大切なことは何なのか？の問いかけスキルや情報をより多く知ることではなく、支援者自身が、自分なりにていねいに状況を観察し、考えていく姿勢、自分の使っている言葉から自分の思考や態度を振り返るといった態度を培っていくことの大切さを気づかされたことは参加されて方々にとって、大きな収穫だったと思います。